

2015年度 国語(中)部会研究計画

I 研究主題

生徒が生き生きと取り組み、確かな国語の力をつける授業の創造

～すべての学習の基礎となる、豊かな言語感覚を育成するために～

II 研究目的

1. 研究の経過

2004・2005年度	『言語活動に主体的・創造的に取り組もうとする生徒を育てるために』 ～目指すものはっきりした授業の追究～
2006・2007年度	『生徒一人一人が生き生きと活動し、確かな国語の力を育てる授業の創造』 ～基礎基本を身につけ、豊かに“伝え合う”生徒の育成をめざして～
2008・2009年度	『伝え合い、高め合う授業の創造』 ～思考の深まりを伴う言語活動の工夫を通して～
2010・2011年度	『伝え合い、高め合う授業の創造』 ～伝えたい思いを引き出す言語活動の工夫を通して～
2012・2013年度	『国語を正確に理解し適切に使える「言語能力」の育成』 ～言語知識・技能の習得から活用を目指した指導の工夫～
2014年度	『生徒が生き生きと取り組み、確かな国語の力をつける授業の創造』 ～すべての学習の基礎となる、豊かな言語感覚を育成するために～

2011年度までの10年間は、「話す・聞く」「書く」「読む」の領域別で「伝え合う力（コミュニケーション能力）」の育成を目指した研究を進めてきた。

2012年度からは、①「基礎的基本的な知識及び技能の確実な習得」、②「基礎的基本的な知識及び技能を活用するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力の育成」、③「主体的に学習に取り組む態度の養成」を意識した研究の推進がより必要と考え、指定教材（2012年度は「小説・物語教材」、2013年度は「説明文教材」）を設けて研究を進めた。公開された授業やレポートが部会員の日々の実践に資するものとなり、管内共有の財産として蓄積することができた。

一方、単年度で指定教材を変更したことで研究の深まりが得られなかったという声も多く、2014年度から2年間は、先行実践の追実践に取り組むこととした。

〈2014年度の成果と課題〉

第二次研究協議会では、ねらいを明確にした構想に基づく公開授業の中で、生き生きと取り組む生徒の姿が見られ、確かな国語の力をつけさせる言語活動例や指導方法について学ぶことができた。レポート交流の場では、追実践の報告が多くなされ、研究の深まりを得ることができた。また、小グループで初見の教材について共同研究を行い、教材の様々な切り口を知るとともに「教材で何を教えるか」という構想力を磨く機会とすることができた。

今後は研究主題に掲げた「生き生きとした取り組み」と「確かな国語の力」の両立に向けて、研究の深化が求められる。さらに多くの実践研究を重ね、考察を深めたい。部会員がより使いやすい資料の整理も必要である。

理論研修会では教員ではない立場の方から言葉を取り巻く問題について話を伺い、実技研修会では電子黒

板の活用例について実践交流を行った。概ね好評であったため、今後も今日的課題を意識して内容を吟味し、幅広い視点から指導力の向上に資する研修機会を設定したい。

2. 主題設定の理由

これまで本部会では、各教科の基盤としての国語科の役割を意識し、身に付けた言語能力を活用してさらに高度な学習や主体的な学びに活かせる、より総合的な言語能力の育成を目指して研究を進めてきた。

そのような「総合的な言語能力」をつけさせるためには、生徒が意欲的に学習活動に取り組もうとする魅力的な授業を展開することが大切である。

魅力的な授業とは、今日何がわかればよいのかを生徒自身がつかみ、「やってみよう」と思える授業であり、その活動を通して「わかった」「できた」「自分の思いを持てた」「自分の思いを伝えられた」「級友の思いを受け止められた」という達成感や仲間との共感・所属感を持てる授業である。

教材で何をどう教えるか、指導者の判断や分析によって大きく変わるのが国語という教科の特徴と言える。教材を深く読み取り、教材価値を明らかにし、「ねらい」を明確にして教材全体を貫く構想を立て、1時間1時間の展開を工夫することで、生徒が目を輝かせて生き生きと学ぶことができる。生徒がそのように学ぶことで、わたしたちが目指す確かな国語の力をつけることができると考え、本主題を設定した。

3. 研究仮説

教材価値を明らかにする綿密な教材分析に基づき、「ねらい」を明確にした授業構想を立て、各指導段階においてどのような言語活動が効果的かを見通し、授業展開を工夫することによって、生徒が生き生きと*取り組み、確かな国語の力*をつけることができる。

※ ここでは次のように押さえる。実践の中での部会員の考察を求めたい。

「生き生きと」 →○学習対象に興味・関心を持ち、あるいは必要性を感じ、自ら学習活動に取り組む様子。

○ねらいの達成につながる言語活動が、生徒主体で活発に(発表や発言が多いということだけでなく、本質に向かって内面的に躍動している状態で行われている様子。

「確かな国語の力」 →○文章を正確に理解し、適切に表現する、伝え合う力。

○相手や目的、状況等によってふさわしい言葉を選択して表現したり、使われている言葉の味わいをとらえて理解したりする力。

Ⅲ 研究内容

1. 研究の視点

研究主題の解明のために、次の四つの視点を中心として各部会員が研究を進め、その成果と課題を市町村及び管内の第二次研究協議会に持ち寄り、共有化を図るとともに、データベース化を目指す。

(1)① 教材価値と「ねらい」を明確にした授業構想の工夫。

② 生徒が目を輝かせて生き生きと取り組む指導の工夫。

(2) 部会員のレポートに追試や改良を加える試み。

(3) 指導者である教師自身の言葉力(知識・言語感覚・読解力等)を高める取り組み。

2. 具体的な取組内容

上記の研究の視点に沿い、各部会員が以下のような具体的な取組内容・方法で研究・実践を行う。石教研

第二次研究協議会の場で、この視点に基づいた研究授業や分科会、話し合い活動等を行い、検証する。

(1) 教材価値と「ねらい」を明確にした授業構想の工夫。

- ①指定教材を設定し、2012年度以降の課題を踏まえて個人研究を進める。
- ②石教研第二次研究協議会において、指定教材の題材をもとに公開授業を行う。
- ③公開授業・個人研究をもとに活発な議論を行い、効果的な指導法についての方向性を探る。

*** 指定教材について……追試・追実践の積み上げのため、以下の指定教材すべてを対象とする。**

小説・物語教材

1年生：「星の花が降るころに」「大人になれなかった弟たちに…」「にじの見える橋」

2年生：「旅する絵描き-パリからの手紙」「盆土産」「アイスプラネット」

3年生：「蟬の声」「高瀬舟」「握手」

説明文教材

1年生：「ちょっと立ち止まって」「シカの落ち穂拾い」「流氷と私たちの暮らし」

2年生：「やさしい日本語」「メディアと上手に付き合うために」「きみは最後の晩餐を知っているか」「モアイは語る」

3年生：「月の起源を探る」「論理の展開に着目して読もう」「ネット時代のコペルニクス」

(2) 部会員のレポートを追試・追実践し、改良を加える試み。

- ①2012年度以降の部会員の研究成果を教材ごとにまとめ、事務局より提示する。
- ②2012年度以降のいずれかのレポートに沿った、あるいは改良を加えた授業を実践し、検証する。

(3) 指導者である教師自身の言葉力（知識・言語感覚・読解力等）を高める取り組み。

- ①理論研修会・実技研修会を設ける。
- ②石教研第二次研究協議会において、小グループで教材を共同分析する時間を設ける。

IV 研究方法

1. 実践検証の方法

- (1) 部会員全員で研究できるように、部会員個々人の研究テーマを明確にする。
- (2) 個人レポートは、「指定教材」についての実践に基づき作成することを基本とし、発展教材も可とする。
- (3) 「地域サークル」で検討し、研究を深める。
 - ①各市町村単位で「地域サークル」を組織し、推進委員を中心に地域単位での共同研究を行う。
 - ②「研究計画（内容）」を市町村単位で明確にし、研究主題解明に向けた研究実践を積み重ねる。
 - ③「成果と課題」について、地域サークルで議論を行った上、石教研第二次研究協議会に持ち寄る。
- (4) 第二次研究協議会の研究授業と個人レポート等のデータベース化を目指し、必要に応じて使える財産とする。

2. 各種研修会の実施

研究主題解明や指導技術向上のために研修会を実施する。

- (1) 理論研修会…例 言語能力養成の示唆になる事柄についての研修（専門的内容）
- (2) 実技研修会…例 生徒が生き生きと取り組む授業の工夫についての研修（実践的内容）

3. 「部会情報」の発行

日常実践の交流や研究資料の提供を行うために、「部会情報」を年4回、事務局が発行する。

4. 教育課程の研究

学習指導要領にもとづき、これまで積み重ねられてきた実践・研究成果を活かしながら、部会員の意見・要望を集約して編成・改訂を行う。

5. ホームページの更新

部会員の交流や研究成果の発信などのため、ホームページの更新・充実に努める。

V 研究体制

1. 地域サークル

- (1) 推進委員を中心に研究の推進を図り、各学校の研究責任者ととも、「学年別」の研究センター（授業者）を選出するなど、共同研究の体制作りを行う。
- (2) 授業公開をもとに、日頃の研究実践を交流し、主題の解明を図る。
- (3) 第二次研究協議会の各分科会の司会者・記録者は、部会役員が中心となって人選し、依頼する。

2. 研究センターサークル

- (1) 中心サークルは管内第二次研究協議会における会場（授業・全体会）を受け持ち、研究の視点に基づいて、学年別に授業を公開することを原則とする。
- (2) 2015年度の中心サークルは「江別」である。次年度以降は千歳→恵庭→北広島→石狩の予定。

3. 研究推進委員会

部会役員と各市町村推進委員で研究推進委員会を組織し、研究計画の具体化、研究成果の集約、管内第二次研究協議会の運営等について研究協議する。なお、研究の継続と深化を図るために、部会役員と各市町村推進委員の任期を原則として2年とする。

VI 年間計画

月	各種研究協議会・諸会議	役員会・推進委員会	具体的研究活動	その他の活動
4月	石教研第一次研究協議会 各市町村第一次研究協議会	本年度研究の 提案・説明	研究計画にもとづく 個人研究の立案	
5月			研究実践①	「部会便り①」発行
6月		計画・準備・運営		「部会便り②」発行
7月	理論研修会			
9月	各市町村第二次研究協議会	計画・準備・運営	市町村サークルでの 中間交流 研究実践②	「部会便り③」発行
10月	石教研第二次研究協議会	計画・準備・運営	研究成果と課題の 全体交流	
11月	実技研修会			「部会便り④」発行
1月		次年度研究計画策定		
2月	各市町村三次研究協議会	本年度研究の総括		
3月		次年度研究体制づくり		

(文責 高橋 浩子)